

特 集

——シンポジウム2「ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁の家族と〈親子離隔〉」

文学における親子離隔の表象*

川津 雅江 (名古屋経済大学)

日本ヴィクトリア朝文化研究学会第22回大会シンポジウム2「ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁の家族と〈親子離隔〉」(2022年11月19日)は、ヴィクトリア朝の理想の家族像の周縁に位置する、下層労働者階級や帝国植民地の非支配民族、奴隷などの家族における、経済的な要因や制度、政策などによって人為的に〈親子離隔〉されるケースに注目したものであった。三つの報告を通じて共通の問題となっていたのは、親と離れた子どもの養育は誰が担っていたか、である。並河葉子氏の第一報告では、シエラレオネ植民地に移送された解放奴隷の子どもたちは、国教会伝道協会によって衣食住を無償で提供され、ミッション運営の学校でイギリスの基礎教育を受けた。森本真美氏の第二報告では、犯罪や非行に走る子どもたちは少年刑務所や感化院のような大規模施設に収容されて、職業訓練を施された。奥田伸子氏の第三報告では、西インド社会においては、子どもの養育は親以外の誰か(祖母が多い)が担うという Child Shifting の文化だったため、親が子どもと離れてイギリスへ移民することを可能にした。

では、文学における親子離隔の描写はどうだっただろうか。

孤児文学の系譜

文学では、18世紀に小説や児童文学が登場して以来、現在に至るまで、親から離隔した子どもを主人公や脇役においた作品が数多く出版されている。それらはしばしば「孤児文学」(orphan literature)とか「孤児物語」(orphan stories)などとサブジャンル分けされているが、そこでいう orphan とは、必ずしも両親もしくは片親を亡くした孤児だけを指してお

らず、いわゆる捨て子 (foundling) も含まれている。これは、そもそも orphan という英語が、『オックスフォード英語辞典』(OED) に 1993 年に追加された定義(その初出例は 1852 年の最高裁判記録)によれば、「親のケア [保護、世話、保育など、多くの意味が含まれる] を奪われた子ども、特に捨てられたか、もしくは育児放棄された子ども」(“one bereft of parental care, esp. through abandonment or neglect”) (“Orphan, Addition 1993”)、つまり捨て子に近い意味も含んでいるからだと思われる。また、孤児が「親のケアを奪われた子ども」も指すならば、シンポジウムで扱われた子どもたちも孤児と言えらるだろう。

さて、このようないわゆる孤児文学に関する研究は、ニーナ・アウエルバッハ (Nina Auerbach) の 1975 年の論文「孤児たちの化身」(“Incarnations of the Orphans”) がおそらく最初だと思われる。アウエルバッハはその中で、18 世紀から 20 世紀前半までの孤児文学について論じ、「ある意味、孤児は小説そのもののメタファーとして考えることができる」と、孤児と小説の両方がもつ、不確実な起源や困難な状況下で生き残ってきたという特徴の類似性を指摘している (Auerbach 395)。まさに小説の誕生とともに孤児が誕生したとも言える。最近では、2000 年に出版されたローラ・ピーターズ (Laura Peters) の『孤児テキスト』(Orphan Texts) によって、特にヴィクトリア朝の孤児文学が注目を浴びるようになった。これ以後、ヴィクトリア朝の孤児文学研究がより一層盛んになり、2020 年には、ダイアン・ウォーレン (Diane Warren) とローラ・ピーターズ編集の『孤児であることを読み直す』(Rereading Orphanhood) が出版され、『孤児テキスト』以後に公表された多くの論文についても言及している。

それら最新の研究を詳しく紹介する紙幅はここにはないが、ピーターズの基本的な考えだけは把握しておきたい。彼女は、小説だけではなく、児童書、詩、大衆演劇など、ヴィクトリア朝文化全般で、孤児の話が流行していたことを指摘し、その原因は、「孤児が家族を必要とする」のではなく、「家族が孤児を必要とする」時代だったからだとして述べている (Peters 1)。つまり、ヴィクトリア朝時代は、家族という概念(シンポジウムにそって言い換えれば、イギリスの理想の家族像——白人中流階級の両親と、両親に愛しまれる(摘出の)子どもたちから構成される近代家族モデル)が危機を

迎えた時代だったので、そういう家族を確立するためには、孤児というスケープゴートを必要とした。家族を脅かす存在である孤児を排除することによって、家族というものを再確認できたのだ。

では、ヴィクトリア朝とその前の時代では、孤児の描き方に違いがあるのだろうか。表1には、孤児が登場する代表的な小説を挙げた。

(表1) 小説における孤児

18世紀～ロマン主義時代	ヴィクトリア朝時代
Daniel Defoe, <i>The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders</i> (1722)	Charles Dickens, <i>Oliver Twist, or the Parish Boy's Progress</i> (1838); <i>Bleak House</i> (1852-53) の Esther Summerson; <i>Great Expectations</i> (1861) の Pip など
Tobias Smollett, <i>The Adventures of Roderick Random</i> (1748)	Charlotte Brontë, <i>Jane Eyre: An Autobiography</i> (1847); <i>Villette</i> (1853) の Lucy Snowe
Henry Fielding, <i>Tom Jones, a Foundling</i> (1749)	Emily Brontë, <i>Wuthering Heights</i> (1847) の Heathcliff
Charlotte Smith, <i>Emmeline, the Orphan of Castle</i> (1788)	W. M. Thackeray, <i>Vanity Fair</i> (1847-48) の Becky Sharp; <i>The History of Penderennis: His Fortunes and Misfortunes, His Friends and His Greatest Enemy</i> (1848-50) の Arthur Penderennis
Ann Radcliffe, <i>The Mysteries of Udolpho</i> (1794) の Emily St. Aubert	George Eliot, <i>Silas Marner: The Weaver of Raveloe</i> (1861) の Eppie; <i>Middlemarch</i> (1871-72) の Dorothea Brooke; <i>Daniel Deronda</i> (1876)
Jane Austen, <i>Emma</i> (1814) の Jane Fairfax	Thomas Hardy, <i>Jude the Obscure</i> (1895)
Mary Shelley, <i>The Last Man</i> (1826) の Lionel Verney と Perdita 兄妹	

これを見ても分かるように、ヴィクトリア朝では、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の小説をはじめとして、貧しい下層階級の孤児の作品が多いのに対し、18世紀からロマン主義時代の小説の孤児で、下層階級出身であるのは、犯罪者の母をもつモル・フランダース (Moll Flanders) だけで、ほとんどが中流階級か、片親がそれ以上の階級の生まれである。そして、モルの場合は、孤児になったばかりのとき教区の世話になったが、

その他の孤児は、多くの場合、親戚とか親の友人に育てられている。

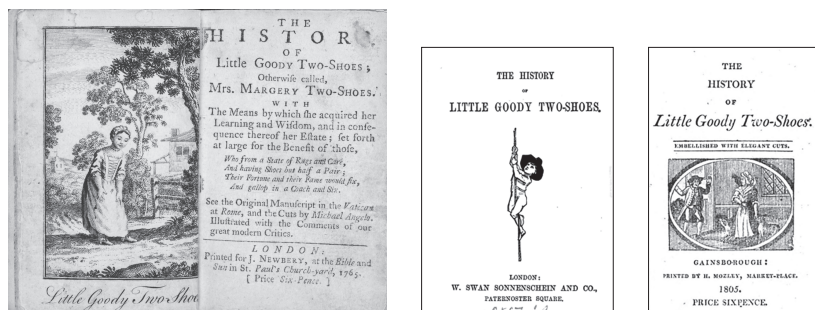
(表2) 児童文学における孤児

<p>18世紀～ロマン主義時代 <i>The History of Little Goody Two-Shoes; otherwise Called, Mrs. Margery Two-Shoes</i> (1765) Toby Teachem (peud.), <i>The Orphan; or, the Entertaining History of Little Goody Goosecap. Containing a Variety of Adventures Calculated to Amuse and Instruct the Lilliputian World</i> (c.1786) Thomas Day, <i>The History of Little Jack, a Foundling</i> (1788) <i>Motherless Mary: or, The Interesting History of a Friendless Orphan</i> (1827)</p>	<p>ヴィクトリア朝時代 Peter Buchan, <i>The Orphan Sailor</i> (1834) Charles Whall, <i>The Orphan's Exile</i> (1838) Lady Isabella Stoddard (peud. Martha Blackford), <i>The Orphan of Waterloo</i> (1840) <i>The Orphan's Friend</i> (Religious Tract Society, [c.1842]) “Trials in the Life of an Orphan Sailor Boy” (vol.2 of <i>Five Sea Novels</i>, [1876]) Lizzie Glover, <i>Victor, The Little Orphan, or the Necessity of Self-Help</i> (1876) Charlotte Elizabeth Bowen, <i>Cared For; or the Orphan Wanderers</i> (1881)</p>
---	--

一方、表2にあげた代表的な児童文学を見てみると、時代にかかわらず、ほとんどがイギリスの白人の貧しい下層階級出身の孤児を主人公にしている。また、興味深いことに、ほとんどの場合、孤児の養育の担い手は、親戚ではなく、赤の他人によってなされている。さらに、ヴィクトリア朝時代には、イギリス人以外の孤児についても言及している作品もある。これらの特徴は、シンポジウムの特に第一、第二報告と関連する。そこで、次に、表2の中から太字で示した三つの作品を取り上げて、詳しく見てみたい。

『リトル・グッディ・トゥーシューズ物語』

児童文学における最初の孤児の物語は、イギリス最初の児童書出版社ジョン・ニューベリ (John Newbery) によって1765年に出版された『リトル・グッディ・トゥーシューズ物語』(*The History of Little Goody Two-Shoes*) である。瞬く間に人気を博して版を重ね、『孤児、もしくはリトル・グッディ・



(1765) © The British Library Board

(1805)

(1884)

(図1) *The History of Little Goody Two-Shoes* のタイトル頁

「グースキャップの面白い物語」(*The Orphan; or, the Entertaining History of Little Goody Goosecap*, c. 1786)のような模倣書も続出した。その人気はヴィクトリア朝になってからも衰えず、少し修正が加えられながら、何度もリプリントされた。

「グッディー・トゥーシューズ」とは、孤児の主人公マージェリー・ミンウェル(Margery Meanwell)のあだ名である。彼女は貧しくて片方の靴しかはいていなかったが、慈悲深い紳士に一足の靴をもらったのが嬉しくて、“Two Shoes”(History 21)とみんなに言いふらしたので、以後そう呼ばれるようになった。

この物語には、のちの孤児の児童書に共通するパターンがいくつか見られる。

第一に、孤児の養育者は赤の他人であること。

トゥーシューズと兄のトミー(Tommy)は小作人の両親の死後、金持ちの親戚に断られたため、教区牧師夫妻に育てられた。

のちの作品で極端な例は、トマス・デイ(Thomas Day)の1788年出版の『捨て子のリトル・ジャック物語』(*The History of Little Jack, a Foundling*)の捨て子で、彼はヤギの乳と老人によって育てられ、ヤギを養母だと述べている。

第二に、女の子の孤児は大きくなって教師として自立すること。

トゥーシューズは、教区の学校へ通う生徒から本を借りたりして、自分

で勉強して学をつけ、学校の先生になり、ついにはその校長にまでなった。

第三に、男の子の孤児は水夫となって海外へでていき、成功して帰国すること。

トゥーシューズに一足の靴をプレゼントした紳士は、トミーには水夫にさせるために上着とズボンを買ってやり、ロンドンへ連れていった。やがてトミーは海外で財を築いて帰国し、妹の結婚式の噂を聞いて駆けつけ、彼女に持参金を渡した。

女子の孤児が大きくなって教師になる話は小説の方が多く、児童書では、男子の孤児の物語が多く、そのほとんどが水夫になる。前述のデイの捨て子ジャックもヤギと老人が亡くなったあと、インド行きの船に乗り、成功して帰国する。また、ピーターズによれば、特に1870年代、80年代に、水夫や水兵になった孤児の冒険物語が人気を博した(Peters, ch.3参照)。

第四に、孤児の児童書はいつもハッピー・エンディングだが、そういう孤児たちは信心深いという特徴がある。

神様を信じるトゥーシューズはいつも善行をおこなったため、地主で男やもめのサー・チャールズ・ジョーンズ(Sir Charles Jones)にみそめられて、彼と結婚し、夫の死後は、遺産を貧しい人たちへの慈善のために使った。「要するに、彼女は、貧民の母親、病人の医者、困窮している人すべての友だちだった」(140)。

一方、『リトル・グッディ・トゥーシューズ物語』がのちの児童書と大きく違うのは、一つには、貧しい孤児の娘が最後には「レディ」(130, 131)、すなわち「レディ・ジョーンズ」(134)あるいは「レディ・マージェリー」(137)になるというシンデレラ・ストーリーであったことである。のちの児童書にはそのように階級を超える話はない。もう一つは、トゥーシューズが動物にも「読み書き」(70, 71)を教えたり、動物たちと話ができることや、トミーがアフリカに漂着後、ライオンを犬のように手なずけて旅をしたり、「ユートピアの国」(147)で昔の哲学者が隠した財宝を見つけたから金持ちになったなど、おとぎ話の要素が色濃いことである。これに対し、ロマン主義時代の孤児の児童書では、教訓的な要素がより強くなり、ヴィクトリア朝になると、よりリアリティのある話になっていく。

『孤児の友だち』

比較のために、ヴィクトリア朝から、二つの作品をとりあげる。

まず、1842年頃の『孤児の友だち』(*The Orphan's Friend*)は、「伝道用パンフレット協会」(Religious Tract Society)によって出版された児童書の一つで、主人公は、図2の中心に描かれている「背の高い、紳士らしい男性」(*Orphan's 6*)のフリーマン氏(Mr. Freeman)である。彼はもと孤児で、いろいろな外国を訪れて苦勞したあと、ロンドンで商人として成功し、田舎に隠遁してからは、農業経営者の夫と死別した自分の妹とその二人の子どもたちと一緒に暮らしていた。そして、妹が亡くなったあとは、14歳の甥リチャード(Richard)と12歳の姪メアリ(Mary)の面倒をみるだけではなく、地元の貧しい未亡人や孤児たちの世話をしているので、「孤児の友だち」(9)と呼ばれている。このように、児童書には珍しく、フリーマン氏とその妹、そして妹の子どもたちは全員、中流階級の孤児である。

フリーマン氏がどうして貧しい孤児たちの世話をしたかということ、自分と妹が孤児だったからだけではなく、「聖書の大的読書家」(9)だったからだ。甥や姪に対しても、聖書の中での孤児の話をたくさんして、神はお前たちに親がないという試練を与えたのだから、それに耐えることが私たちの義務であると説いたりする。また、第三章のタイトル(God the Father of the Fatherless)が端的に示すように、神は、「父なし児の父親」として、孤児を守ってくれると教えたりした。

しかし、この物語で、もっとも興味深いことは、第七章で、フリーマン氏が若い頃異国で見た貧しい異教徒、特にインドのヒンドゥー教徒の孤児について語り、いかにキリスト教の国に生まれたことが幸せなことか、と教えていることである。つまり、インドでは、イングランドと違い、「親切な先生も牧師もない」(105)、「孤児院も慈善協会もない」(113)ので、孤児はほうっておかれ、そのまま誰からも嘆かれることがなく死んでしまう。また、もし生き残っても、ヒンドゥー教では、夫が亡くなると妻も一



(図2) *The Orphan's Friend*
(c. 1842), p.5.

緒に火葬されるという「妻の殉死」(suttee)が行われており、残された娘も一緒に火葬され、息子の方は親戚が誰も面倒を見ずに奴隷として売られた。フリーマン氏がインドを去って以来、妻の殉死の風習は衰退したけれども、飢饉がひどいときは、今でも孤児が売られている。だから、東インドのキリスト教の伝道者たちは、インドの孤児のために孤児院や学校を設立し、イギリスの慈善家たちはお金をインドに送っているのです、そのおかげで多くのヒンドゥー教の子どもたちが救われているのだ、という。そういう話を聞いた二人の子どもたちは、自分たちのわずかな小遣いからインドの孤児たちのために募金をする気になる。

『世話される子たち』

神様は、父なし兄の父親として孤児を守ってくれるという考えは、シャーロット・エリザベス・ボーエン (Charlotte Elizabeth Bowen) の1881年の物語『世話される子たち—あるいは放浪の孤児たち (Cared For; or the Orphan Wanderers)』にも受け継がれている。

この物語では、召使いと女中だった両親は結婚してオーストラリアに移住し、農業をやっていたのだが、父親が病死し、そして母親もイングランド行きの中舟の中で亡くなる。そのため、孤児となった11歳くらいのフィリップ (Philip) と7歳くらいのスージー (Susie) は、唯一の親族である母親のいとこの世話になろうと、プリマスから徒歩でロンドンへ向かう。



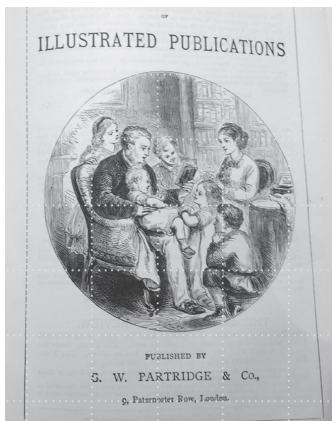
(図3) Charlotte Elizabeth Bowen, *Cared For* (1881), p. 13.

二人の兄妹は、母親が、お前たちには親がいなくなるけれども、「神様がお前たちを見守ってくださいさるでしょう」、「お前たちがイングランドに着いたら、神様がどこかにわが家(home)を与えてくださるでしょう」(Bowen 21) と言い遺した言葉どおり、道中でさまざまな労働者階級の人に食事や寝る場所を世話してもらうことで、神に守られていることを知る。そして最後に助けてくれた貴族サー・ヘンリー・ハーディング (Sir Henry Harding) のおかげで、母親のいとこがすでに亡

くなっていることを知り、そこで旅を終え、サー・ヘンリーに、村の学校教師の家での寄宿費や養育費をまかなってもらうことになる。やがて、妹は地元の学校教師になり、兄の方はサー・ヘンリーの代理人の事務所で働き、二人は学校附属の家に住み、ようやくわが家を見つけたことを喜んで、話は終わる。

このように、『世話される子たち』では、グッディ・トゥーシューズと違って、下層階級の孤児が大人になって成功しても、上の階級にあがるということはない。また、『孤児の友だち』との関連で看過できないのは、兄妹が旅の途中で出会ったジブシー一家である。そこには一週間も世話になり、ジブシー一家からもこのまま一緒にいるようにと言われる。しかし、ジブシーたちが移動するとき、二人は、「神様は私たちがジブシーたちのところに留まらせるつもりではないと思う」(75)として、彼らと別れる。ジブシーはキリスト教徒ではないので、たとえ食べ物と寝る場所が約束されていても、ジブシー一家の家庭は二人のわが家ではなかったのだ。

最後に、『世話される子たち』の巻末には、出版社の絵本目録が数ページにわたって掲載されているが、その中扉の挿絵(図4)(この頁は『世話される子たち』の最終頁と見開きである)に注目したい。それは、森本氏が



(図4) Charlotte Elizabeth Bowen, *Cared For* (1881) 巻末の出版カタログの中扉



(図5) Franz Xaver Winterhalter, “The Royal Family” (1846). © Royal Collection Trust.

シンポジウムの主旨説明で提示したフランツ・クサーヴァー・ヴィンターハルター (Franz Xaver Winterhalter) の1846年のヴィクトリア女王一家の絵(図5)と驚くほど似ていて、父親、母親、そして子どもたちが五人、と数まで同じ家族が描かれている。『世話される子たち』の二人がのちに誰かと結婚して、このような家族を築くだろうということを、この挿絵は暗示しているかのようなのである。そして、それは、ヴィクトリア朝の中流階級の理想の家族像が、労働者階級にとっても理想になったことを端的に示していると言えるだろう。

* 本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第22回全国大会シンポジウム2「ヴィクトリア朝イギリスの家族——周縁的家族と〈親子離隔〉」(2022年11月19日)のコメント原稿に加筆・修正したものである。

引用文献

- Auerbach, Nina. "Incarnations of the Orphan." *ELH*, vol. 42, no. 3, 1975, pp. 395-419. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2307/2872711>.
- Bowen, Charlotte Elizabeth. *Cared For; or the Orphan Wanderers*. London, 1881.
- Day, Thomas. *The History of Little Jack, a Foundering*. London, 1788.
- Defoe, Daniel. *The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders*. 1722. Penguin, 1994.
- The History of Little Goody Two-Shoes; Otherwise Called Mrs. Margery Two-Shoes*. London, 1777.
- "Orphan, Addition 1993." *Oxford English Dictionary*, 2nd. ed. on CD-ROM (v.4.0), Oxford UP, 2009.
- The Orphan's Friend*. London: Religious Tract Society, c.1842.
- Peters, Laura. *Orphan Texts: Victorian Orphan, Culture and Empire*. Manchester UP, 2000.
- Teachem, Toby (pseud). *The Orphan; or, the Entertaining History of Little Goody Goosecap*. London, c.1786.
- Warren, Diane, and Laura Peters, editors. *Rereading Orphanhood: Texts, Inheritance, Kin*. Edinburgh UP, 2020.

Summary

Literary Representations of Parent-Child Separation

Masae Kawatsu

This paper examines the representation of parent-child separation in English literature from the mid-eighteenth century, the time of the emergence of the novel and children's book, to the late nineteenth century. The Victorian era in particular saw so-called "orphan literature" or "orphan stories" flourishing. According to Laure Peters in *Orphan Texts* (2000), it was not because "orphans needed a family" but because "the family needed orphans." In other words, the Victorian era was when the ideal British family—a modern family consisting of white middle-class parents and their legitimate, beloved children—was in crisis, so it needed a scapegoat, an orphan.

In the Victorian era, many novels, including those of Charles Dickens, depicted poor, lower-class orphans. Most novels from the mid-eighteenth century to the Romantic era, however, portray orphans who come from middle-class families or whose father or mother is upper class. A solitary exception is *Moll Flanders* whose single mother is a lower-class criminal. While other orphans are brought up by their relatives or parents' friends, Moll is left to the care of the parish. On the other hand, children's books, regardless of the era, feature orphans from the poor lower classes as protagonists. Their caregivers are not their relatives but strangers. Some books from the Victorian era portrayed pagan orphans too. These features seem to be relevant to the reports of the symposium at the conference of the Victorian Studies Society of Japan held on 19 Nov. 2022.

The paper then takes a closer look at *The History of Little Goody Two-Shoes* (1765), the first really successful children's book to feature an orphan story. It has several points in common with subsequent orphan stories. For example, they always have a happy ending because the orphaned protagonist, like Goody Two-Shoes, is characterized by being deeply religious. In *The Orphan's Friend* (c. 1842) published by the Religious Tract Society, Mr. Freeman was an orphan when a child and now succeeds in business. He tells orphans for whom he takes cares that God watches them as "the father of the fatherless child." Charlotte Elizabeth Bowen's *Cared For* (1881) also illustrates two orphaned siblings who wander to find their own happy home, keeping in mind their mother's dying words, "God will give you a home." On their way, they don't want to prolong their stay with the gipsy family because they are not Christian. The illustration facing the last page of the text suggests the ideal family of the Victorian middle class has become an ideal for the lower class by the late nineteenth century.